

優秀賞

きみとぼく

鹿児島県 霧島市立国分南小学校四年 五領 桜祐

「きい、元気かい。」
きいがいなくなり、一年がたとうとしている。ぼくが生まれてから九年間、ずっと一緒に弟のように愛しいきい。

きいは人ではなく犬だ。ぼくが生まれるずっと前に、祖父母の家にやってきた。人でいうと八十四才でぼくよりもずっと大人だけれど、小さくて甘えん坊のきみ。十七年前、ぼくの大好きなおじがサッカーの大会でじゅんゆう勝をした時に、おじの活やくをみちびいた幸運の黄色のスパイクから名付けられたきい。家族のラッキーカラーを受けつぎ大切なそんざいになりました。せいかくはおとなしくこわがりがり子どもが苦手だ。さん歩中に子どもがよってくるとかくれるきみ。

九年前、きみとぼくとの出会いはクンクンと鼻を近づけてにおいをかぎ、

がきみとぼくの最後の言葉とは知らずに。

大雨がふり、なんだかそわそわむかえを待っていると、息を切らせあわてた母が、

「きいがお空に——。」

ザーザーと雨の音で聞こえづらく、何を言っているか分からない。頭の中が真っ白になる。

「何を言っているの、うそはやめて。」
と、つい強い口調になる。そして時間が止まっているかのようで、車は祖父母の家に向かう。そこにいたのは温かい毛布の上にあった冷たいきみ。そこでなんとなく、「死」を感じた。きみのわずかなぬくもりが残っている。かなしくてかなしくて、心にぽっかりあながあいたような、今まで感じたことのない気持ちになる。次の日の朝、父母にお願いし、登校前に会いに行き、
「今までいつもそばにいてくれてありがとう。」
と声をふるわせ伝えた。

きいの旅立ちの日。ぼくのいとこがたん生し、きみから命のバトンをつなぐせき起きた。今年も秋風を感じるときみを思い出す。

「きい、今も元気に走り回れているかい。」
ずっとぼくの心の中で生き続けている。



「だれだ、だれなのだ。」
と、低く小さな声を出し、近づいてははなれけいかいしていたそうだ。ぼくが歩き出し、追いかけるのにげ回るきみ。いつしか、毎日いっしょにいる時間が、きよりを近づけ、ぼくの横がお気に入り、おなかに。細長いしっぽをブンブンと力強くふり、おなかをなでてとひっくり返るきみ。兄弟のように育ったきみとぼく。

昨年の秋風が心地よい季節に寝ていることが多くなったきみ。それでもぼくが学校から帰ると、力は弱いが全力でしっぽをふり、むかえてくれる。あの日もいつもと変わらず、きみが横で見守りながら宿題をする。終わらせサッカーへ向かうためじゅんびをし、

「いってきます。」

と、頭をポンポンとやさしくなでて出かけた。これ